

第六回 家村中佐の兵法講座

平成二十四年十月十四日

地形篇 戦いの不変要素(地形)と可変要素(人)についての道理

一 孫子曰わく、地形には、通ずる者あり、挂(さまた)ぐる者あり、支(ささ)うる者あり、隘(さき)者あり、険なる者あり、遠き者あり。

地の道 || 地形に応じて勝敗の運命が定まる道理

- ① 通 || 我れ以て往くべく彼れ以て来たるべき
- ② 挂 || 以て往くべきも以て返り難き ↓ 奇襲
- ③ 支 || 我れ出でて不利、彼れも出でて不利 ↓ 対陣
- ④ 隘 || 我れ先ずこれに居れば、… ↓ 先制
- ⑤ 険 || 我れ先ずこれに居れば、… ↓ 先制
- ⑥ 遠 || 勢い均しければ以て戦いを挑み難く、…

始計篇(二十六頁) 地とは遠近、険易、広狭、死生なり

二 故に、兵には、走る者あり、弛む者あり、陥る者あり、崩るる者あり、乱るる者あり、北(に)ぐる者あり。凡そ此の六者は天の災に非ず、將の過ちなり。

敗の道 || 統率や指揮に絡む敗北の要因

- ① 走 || 敵前逃亡(戦わずして逃げる)
- ② 弛 || 軍紀弛緩
- ③ 陥 || 士気沈滞
- ④ 崩 || 内部崩壊
- ⑤ 乱 || 無統制、烏合の衆
- ⑥ 北 || 敗走(戦つて敗れて逃げる)

【闘戦経】第二十章 立派な軍隊の条件(八七、八九頁)

— 將に胆有りて軍に踵無きものは善なり

三 夫れ地形は兵の助けなり。敵を料つて勝を制し、険夷・遠近を計るは、上將の道なり。

合戦の道理 || 主要手段(敵を料る、勝を制する)と補助手段(険夷・遠近を計る)の組み合わせ

戦道必らず勝たば、主は戦う無かれと曰うとも必らず戦いて可なり。

四 卒を視ること嬰兒の如し、故にこれと深谿に赴くべし。

地形は不変 ↑ ↓ 士卒は主将の心次第で強くも弱くもなる

【闘戦経】第二十五章 威を懼れて罰を懼れず(一〇二頁)

五 敵の撃つべきを知り吾が卒の以て撃つべきを知るも、而も地形の以て戦うべからざるを知らざるは、勝の半ばなり。

六 彼れを知りて己れを知れば、勝 乃ち殆(あや)うからず。
地を知りて天を知れば、勝 乃ち全うすべし。

「地形」という土俵の上で、「天候・気象」という環境を克服して、「人」を動かして戦う

「敵」「我」「空間(地形・気象)」「時間」＝戦いの四要素

― 敵の実力を知ることが難しいが、味方の真の力を知ることがさらに難しい！

九地篇

九とおりの土地の形勢に応じた戦い方などについて説くもの

自軍をわざと絶対絶命の窮地に誘導し、兵士を戦わせる戦法を強調(弱い兵卒を前提)

一 孫子曰わく、用兵の法には、散地あり、軽地あり、争地あり、交地あり、衢(く)地あり、重地あり、圯(ひ)地あり、困地あり、死地あり。

① 散地 〓 諸侯自ら其の地に戦う者 ↓ 則ち戦うこと無く

② 軽地 〓 人の地に入りて深からざる者 ↓ 則ち止まること無く

③ 争地 〓 我れ得たるも亦た利、彼得るも亦た利なる者 ↓ 則ち攻むること無く

④ 交地 〓 我れ以て往くべく、彼れ以て来たるべき者 ↓ 則ち絶つこと無く

⑤ 衢地 〓 諸侯の地三属し、先ず至つて天下の衆を得る者 ↓ 則ち交を合わせ

⑥ 重地 〓 人の地に入るに深く、城邑に背くこと多き者 ↓ 則ち掠め

⑦ 圯地 〓 山林・險阻・沮沢、凡そ行き難きの道なる者 ↓ 則ち行き

⑧ 困地 〓 由りて入る所のもの隘く、従つて帰る所のもの迂にして、

彼れ寡にして以て吾の衆を撃つべき者 ↓ 則ち謀り

⑨ 死地 〓 疾戦すれば則ち存し、疾戦せざれば則ち亡ぶ者 ↓ 則ち戦う

※ ② ～ ⑨ を絶地という。

二 利に合えば而ち動き、利に合わざれば而ち止まる。

三 先ず其の愛する所を奪わば、則ち聴かん。

【闘戦経】第三十章 螫毒の一手(二一八、二二〇頁)

第四十五章 速やかに敵の恃むところを討つ(一五七、一五九頁)

四 これを往く所なきに投ずれば、死すとも且た北げず。死焉んぞ得ざらん、士人力を尽す。

令の発するの日、士卒の坐する者は涕襟を濡し、偃臥する者は涕頤に交わる。

【闘戦経】第十二章 死生観(六三頁)

第十三章 懼れと覚悟(六六、六八頁)

五 故に善く兵を用うる者は、譬えば率然の如し。率然とは常山の蛇なり。其の首を撃てば則ち尾至り、其の尾を撃てば則ち首至り、其の中を撃てば則ち首尾俱に至る。

夫れ呉人と越人との相い悪むや、其の舟を同じくして濟りて風に遭うに当たりては、其の相い救うや左右の手の如し。

勇を齊えて一の若くにするは政の道なり。剛柔皆な得るは地の理なり。

六 其の事を易(か)え、其の謀を革(あらた)め、人をして識ること無からしむ。

二つの側面

- ① 自軍の兵士を誘導：兵士が逃亡せず、決死の覚悟で戦う
- ② 相手の諸侯を誘導：敵主力を差し向けて決戦を強要する

帥(ひき)いてこれと期すれば高きに登りて其の梯を去るが如く、深く諸侯の地に入りて其の機を発すれば群羊を驅るが若し。

九地の変、屈伸の利、人情の理は、察せざるべからざるなり。

屈伸の利は消極と積極の両策の適切なる採否、停止と進出、守勢と攻勢
人情の理は環境に反応する将兵心理の法則

【闘戦経】第二十章 立派な軍隊の条件(八七、八九頁)

第四十七章 勝敗は神気の張弛による(一七〇、一七二頁)

命令の与え方・・・方針(目的)と任務(目標・方策)

七

凡そ客たるの道は、深ければ則ち専らに、浅ければ則ち散ず。

国を去り境を越えて師ある者は絶地なり。②③④

四達する者は衢地なり。⑤

入ること深き者は重地なり。⑥

入ること浅き者は軽地なり。①

背は固にして前は隘なる者は困地なり。⑧

往く所なき者は死地なり。⑨

《竹簡本》 倍(うしろ)は固くして前に敵ある者は死地なり。⑨

往く所なき者は窮地なり。

是の故に

① 散地には吾れ將に其の志を一にせんとす。

② 軽地には吾れ將にこれをして属(つづ)かしめんとす。

《竹簡本》 これをして儻(かが)ましめんとす。

③ 争地には吾れ將に其の後を趨(うなが)さんとす。

《竹簡本》 留まらざらしめんとす。

④ 交地には吾れ將に其の守りを謹しまんとす。

《竹簡本》 其の結びを固くせんとす。

⑤ 衢地には吾れ將に其の結びを固くせんとす。

《竹簡本》 其の恃むところを謹まんとす。

⑥ 重地には吾れ將に其の食を継がんとす。

《竹簡本》 其の後を趣(うなが)さんとす。

⑦ 圯地には吾れ將に其の塗(みち)を進めんとす。

⑧ 困地には吾れ將に其の闕(けつ)を塞がんとす。

⑨ 死地には吾れ將にこれに示すに活きざるを以てせんとす。

故に兵の情は、困まるれば則ち禦ぎ、己むを得ざれば則ち闘い、過ぐれば則ち従う。

《竹簡本》 故に諸侯の情は、遠ければ則ち禦ぎ、己むを得ざれば則ち闘い、過ぐれば則ち従う。

八 これを犯(も)つるに事を以てして、告ぐるに言を以てすること勿かれ。

これを犯(も)つるに利を以てして、告ぐるに害を以てすること勿かれ。

《竹簡本》 これを犯(も)つるに害を以てして、告ぐるに利を以てすること勿かれ。

これを亡地に投じて然る後に存し、これを死地に陥れて然る後に生く。

夫れ衆は害に陥りて然る後に能く勝敗を為す。《竹簡本》 能く敗を為す。

九

始めは処女の如くにして、敵人戸を開き、後は脱兎の如くにして、敵人拒ぐに及ばず。